

# 幼児の音楽リズムの捉え方の発達

## — 『リズムの図式』から—

Development How to Capture the Rhythm in Music of Young Children  
- Consideration from “the Picture of Rhythm” Drawn by Young Children -

持田京子  
(こども学科 准教授)

**抄録** 3歳から5歳の幼児に、簡単なリズムを示し一緒に手を叩き、図を書いてもらった結果、幼児は目には見えないリズムを創造的に図を表した。さらに、24時間後にはその図を見て同じようにリズムを再現する幼児もいた。その過程では年齢が進むごとに、リズムの捉え方の違いが見られ、捉え方や表し方には図形からメトリックへと独自の発達の方向性がみられた。

【キーワード：幼児 音楽リズムの発達 リズムの図】

1. 緒言 小林宗作(1893-1963)は「はじめにリズムありき」<sup>(1)</sup>と述べ、我々は遠い祖先からリズム本能を受け継いでいると述べる。そして「即ち事の起こりはリズムであった」として、乳幼児が成長するにしたがって、自然と肉体と精神の調和によって音楽リズムにより、肉体を覚ましていく必要性を述べている。小林の「総合リズム教育」の理念は、「音楽リズム」が初めにくるのではなく、リズムが「自然と調和した運動」から始まると述べていることである。さらに「精神的リズム」＝生活 感動することである<sup>(2)</sup>、と述べていることにも小林の理念がみえる。小林の述べるリズム教育は、本来の幼児が生活の中で「生きる」過程に即して行うものであり、幼児に音楽リズムをあてはめるのではなく、個々が主体となる考え方でもある。実際に小林は「音は耳に、リズムは全身に」と述べて、まず肉体が自然と共に奏でる調和の大切さを実践している。

乳幼児は母親の胎内にいるときから、まず自分のリズムが身体にある。そして外界に出てからも次第に遊びや生活の中で様々なリズムの体験を積み重ねていく。例えば、父母が語り掛ける言葉のリズム、自然の小鳥のさえずりなどもそうであろう。そして、生活の中でもオルゴールやテレビから流れる歌を聞いたり、保護者と外出した際に、街頭や店で流れるBGMなど、様々な創られた音楽的なリズムにも触れ、気づいていく。そして、園生活を送るようになると、多くの友達の持つリズムに触れたり、手遊びや、体操、歌、合奏など様々

な音楽的なリズムも体験していくだろう。このように、乳幼児は遊びや生活の中で様々なリズムを大人には気づかない乳幼児らしい感覚や思いで、自分の持っているリズムと重ね合わせて受けとめていると考えられる。これらの中には、大人が意識しない中で歌う子守歌やトントンと寝かしつけるリズムなど、我が国本来の文化的なリズムの伝承があり、それら乳幼児が経験するリズムの全てが小林の述べるように「生きる過程」に行われ、それらに注目することが必要であるのではないだろうか。

小林が「はじめにリズムありき」といったように、乳幼児は母親の胎内からリズムを感じており、自然に音やリズムを身体に取り入れている。そしてリズムを感じ、捉え、認識していく。しかし、保育現場においてその過程を振り返ることなく、保育者は何となく「こどもは音楽が好き、歌が好き、手遊びが好き」などの理解で解決されており、大人が与えることだけで、その意味を考えることが少ないように、長年現場に多くかかわっている筆者には思える。そしてさらに「生活リズム」と「音楽リズム」と分けて考え、その場限りのリズムを大人の都合で与えてしまうことも多いように思える。そのような中、幼児が外界のリズムをどのように感じて受け止め、認識するのか。また、何を感じて受け入れるのか。それらの過程を探ることは今後の乳幼児教育の何らかの手がかりになると考えた。

ドロシー・T・マクドナルドらは、「拍を認識

していること」を証明する能力は、リズムを知覚する能力だけではなく、より発達した調整力をもたらず身体的な成熟にも依存している」<sup>(3)</sup>と述べている。これらのリズムに対する調整力や調和する力はいつ頃、どのように身に着けていくのだろうか。幼児のリズムの認識を知る方法として梅本(1921-2002)は「音楽という時間的な事象を、空間の中に表出することによって、子どもが音楽をどのように理解し認知しているかという音楽的認知発達の水準がよりの確になる」<sup>(4)</sup>そしてそれらは個人実験に頼らざるを得ないと述べている。

幼児のリズムの認識に関する研究として古市久子(1972)<sup>(5)</sup>は早期に至る過程を分析して4つの型を示している。岡野満里、丹羽劭昭(1973)<sup>(6)</sup>は幼児がリズムパターンを捉える過程において、始めに全体として大まかにとらえ、のちに部分とのリズムの関係を次第に認識していく結果を示している。最近の実践的研究では、水野信子、安藤久雄ら(2015)<sup>(7)</sup>は、児童の拍の獲得を音楽的鑑賞時の手拍子を学年及び、変奏曲ごとに分析した結果、6年間で段階的に獲得することを述べている。高須浩美(2016)<sup>(8)</sup>は、「幼児の音楽理解は音高別を区切ったり、まとまりをつけたりして、そこに何らかの意味付けをして理解しようとしている」と述べている。

また持田京子(2014)<sup>(9)</sup>は幼児が歌を人に分かるように書く研究を行った際、幼児がすでに「歌を人に分かるように、音やリズムを図などで書き表すことが可能であると、結果を報告している。

これらの研究からも、幼児がリズムを理解する段階や、自分なりにリズムを認識して表せることが分かる。そこでこれらの研究を基に3歳～5歳の幼児に、簡単なリズムを「自分や人が見ても、分かるように紙に書いて」と書いてもらい、さらに幼児が書いた紙を見てそのリズムを再現してもらうことにした。それらの過程を観察したり、幼児の書いた図を分析することで幼児のリズムへの意識やその捉え方を理解できるのではないかと考えた。また、時間をあけてその書いた図式を見て、そのリズムを正確に再現出来るかを実際に試みることで、幼児がどのようにリズムを記憶するかを探ることができると考えた。我が国の幼児がどのようにリズムを捉えていくのか、その過程を探ることで、我が国の幼児の今後のリズム教育にも何らかの形で迫ることができると考えた。

## II 研究の方法

(1) 観察期間・回数 平成〇年9月・実験日とその翌日2回

(2) 対象児 S県近郊の私立保育所3歳～5歳児A園(筆者の指導園)3歳6名・(男児3・女児3)4歳児6名(男児2・女児4)・5歳児8名(男児4・女児4)(縦割りクラス)計20名

### (3) 観察方法

① ♪♪♪♪の簡単なリズムをタンバリンで2回叩き提示し幼児にも「どうぞ」と言って一緒に手で叩く。もう一度繰り返す。幼児の声に耳を傾け、必要があれば何度か行う。

② 聞いたリズムを人が見て分かって叩けるように紙(A4 白)に書いてもらう。書くときは自由遊びで使っている鉛筆、マジック、クレヨンを置いておき、好きなものを使うことにする。書く内容は、字、絵、記号など自分で感じて伝えられると思ったものを書いてよいと伝える。

③ 書き終わったら皆で自分の書いた絵を見てリズムを手でたたいて再現してもらう。

④ 翌日(24時間後)、個々に呼び、自分の書いたリズムの絵を見せ、そのリズムを再現してもらう。

注：再現は音の数だけでなく速さも入れて♪♪♪♪のリズム通りに叩けたものを再現として扱う。繰り返して叩くのは良いとする。

⑤ 観察記録を手掛かりにクラス担当者(女性30代、保育歴8年)と共に、幼児の書いたものを分析する。それらの妥当性を他の保育経験者(女性40代、保育歴12年)に確認する。

#### [子どもの書いたリズム図を見る基本的な視点]

ドロシー・T・マクドナルドらが音楽的発達の水準を示した『最も若い学習者の獲得すべき基本的概念』の重要な特徴(リズム理解)<sup>(10)</sup>の3点を基に以下の4点を基本的な視点とする。

1. リズムが鳴っているように感じる。  
(リズムの音や長さなどが何らかの形で書かれている)
2. 「一貫した拍」がある。  
(リズムが同じ図や文字など何らかの形で規則的に意識されている。例 同じ図が並べてある)
3. リズムパターンを長短、沈黙から考える。  
(図や文字などを使って長さ、休みなどを何らかの形で示している)

4. その他

Ⅲ 結果

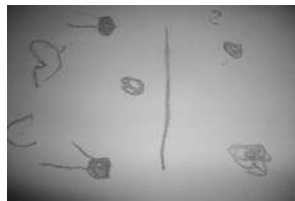
(1) ♪♪♪♪ のリズムを示し幼児と一緒に叩き、それを人に分かるように書いてもらった。マクドナルドらの考え方を基本としてそれらの図を分析した結果、表1のような結果が見られた。

表1「聞いたリズムを人が見て叩けるように紙に書いてもらった結果」

書いた図の内容	3歳	4歳	5歳
1. 鳴っているように感じる。 (絵、図やかたまりなどで感じたリズムを示す) 図例①②③④⑤	4名	3名	1名
2. 一貫した拍がある。 (図、言葉などでリズムを自分なりに拍を意識して書く) 図例⑥⑦⑧	0	2	4
3. リズムパターンを捉える (図、言葉などで、リズムの長短、沈黙を書く) 図例⑨⑩	0	0	2
4. その他 (白紙、自由画、なぐり書き) 図例⑪⑫	2	1	1

【図例】

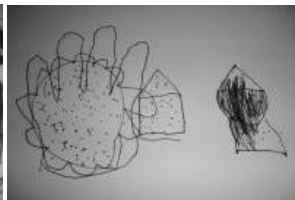
1. 感じたように描く。  
(絵、図やかたまりなどで感じたリズムを示す 図例①～⑤)



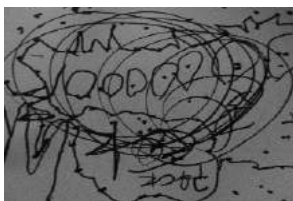
図例① 3歳児



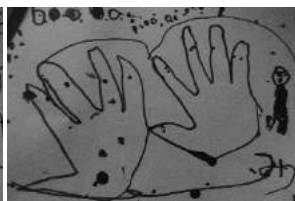
図例② 3歳児



図例③ 4歳児

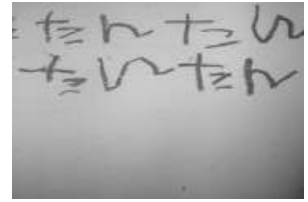


図例④ 4歳児



図例⑤ 5歳児

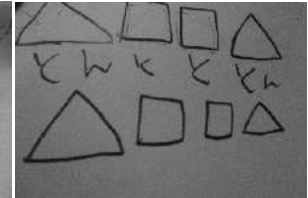
2. 一貫した拍がある。  
(図、言葉などでリズムを自分なりに拍を意識して書く) 図例⑥～⑧



図例⑥ 4歳児

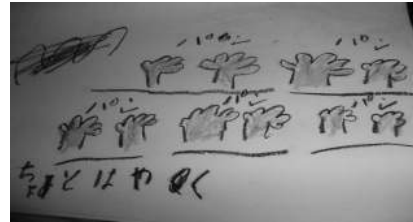


図例⑦ 4歳児



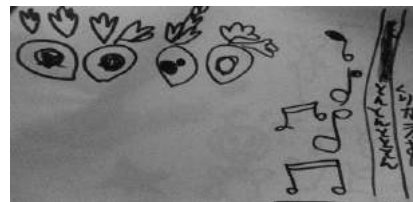
図例⑧ 5歳児 (翌日リズムを再現)  
△□で音の速さを示す。

3. リズムパターンを捉える (図、言葉などで、リズムの長短、沈黙を書く) 図例⑨⑩



図例⑨ 5歳児 (翌日リズムを再現)

手・パンパンの音と共に速く叩く場を示す。

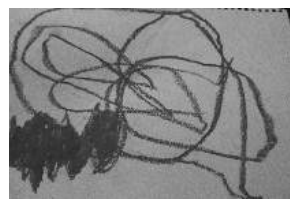


図例⑩ 5歳児 (翌日リズムを再現)

手と○を書き、○の中に音の速さの●を入れる。

「とんとんととん」を繰り返しも記入。

4. その他 (自由画、なぐり描き)



図例⑪ 3歳児



図例⑫ 4歳児

(「いつも書いている絵だけど気持ち良さそうに書いている」と担当保育者が述べている)



(2) 図を書いてすぐに、書いたリズムを個々に手で叩いてもらった結果、再現した幼児は7人であり、表2の結果となった。

表2「書いてすぐにリズムを再現した幼児の内訳」

書いた後リズムを再現した幼児7名の内訳	3歳	4歳	5歳
1. 鳴っているリズムを感じ、絵、図やかたまりで示した幼児	0名	0名	0名
2. 自分なりに拍を意識して書いた幼児	0名	2名	3名
3. リズムパターンを捉えて音の長短などを意識して書いた幼児	0名	0名	2名
4. その他	0名	0名	0名

(3) 24時間後の翌日同時間頃に、前日一緒に叩いたリズムを自分の書いた絵図を手掛かりに「昨日一緒に叩いたリズムを覚えている？」と書いて書いた絵図を見せてリズムを手で叩いてもらった。

表3「書いて24時間後にリズムを再現した幼児内訳」

書いた後リズムを再現した幼児3名の内訳	3歳	4歳	5歳
1. 鳴っているリズムを感じ、絵、図やかたまりで示した幼児	0名	0名	0名
2. 自分なりに拍を意識して書いた幼児	0名	0名	1名
3. リズムパターンを捉えて音の長短などを意識して書いた幼児	0名	0名	2名
4. その他	0名	0名	0名

3歳～5歳の幼児20名全員にタンバリンで簡単なリズムを叩いて示し、それを手で叩いて再現した後そのリズムを人が見て分かるように画用紙にクレヨン・マジック・鉛筆を使って、書くように指示した。縦割り保育のA園で3歳～5歳まで同時にリズムを叩く活動を行ったが全員楽しんで自ら手を叩いていた。

3歳児はリズムを叩くときは周りを見て模倣が多く、叩くリズムも正確ではなかった。書く場面では自由画で、なぐり書きに近いものを書いている幼児もいて、リズムとして直ぐにわかる図は見られなかったが、丸を書く、形を書くなど、図例①②のようにリズムを「かたまり」として書く姿も見られた。観察によるとリズムを叩く再現のときも3歳児はリズムを捉えたはっきりとした表出には至っていなかった。翌日にリズムを再現したが、再現の意味は意識せず、楽しそうにタンバリンを叩く姿がみられた。

4歳児は一生懸命リズムを叩き、書く時もすぐ書く幼児、戸惑いながらも自分なりにリズムを言葉にして書いている幼児、「○ちゃんを書いているの」とリズムを意識しないで自分を書く幼児も見られた。また「たんたんたん」「パンパンパン」など自分なりにリズム+音+数などを意識している幼児もみられ、様々だった。(図⑥, ⑦, ⑧) また4歳児は翌日に昨日書いた図を見せて「叩いてね」と頼むと積極的に「できるよ」と言いながら、3人は音の数を叩いて見せる姿があり、再現はできなかったものの、4歳児なりにリズムを「拍がある」と意識していることが見られた。

5歳児になると、取り組み方に違いが見られ、タンバリンのリズムを聞き、手を叩くときも保育者に注目して正しく模倣する幼児がほとんどであった。そして自分なりに「たんたんたんたん」などと言ったり、考えて叩く姿も見られた。書く場面でも手を叩きながら一生懸命考えて書く姿が多く見られるようになった。また、図⑨では手で叩く図と音の数だけでなく、はやくすべきところに「ちょっとはやく」など、音の長短にも気づき書き込む幼児もいた。また、図⑩では「とんとんととんと」とその音符及び「くりかえし」の注意まで書いてあり、これらはリズムを客観的に捉えている、と考えられた。翌日に、「昨日のリズムを覚えている？」と聞くと絵を見ずに正確に叩く幼児が1名、絵を手掛かりにして叩く幼児が2名見られた。

#### IV 考察

以上の結果よりドロシー・T・マクドナルドら(2003)が述べるように、幼児はリズムを認識して4歳～5歳児になるとリズムをある程度意識することが分かった。そして5歳児になると、自分でリズムを叩く⇒考えて書く姿があり、意識して聞こえた拍子を記憶して書くことが可能になるこ

とが観察できた。そしてそれと同時に幼児は全員リズムの捉え方が違い、自分なりに創造的なイメージをリズムに持ち手掛かりにできることが分かった。

### (1) 幼児の年齢別リズム意識と指導

#### ○3歳児「リズムを感じる時期」

3歳児にタンバリンでリズムを示し、そのリズムと一緒に叩きそれらを書いてもらった結果、「リズムをかたまり、線などに感じたままに書いて表す」時期であることがみえた。3歳児にとってリズムは遊びの中で、その音の長さや、音高、大きさなどつながった面白さや不思議さをたくさん感じるものであり、リズムを味わうことが楽しい遊びなのであると考えられた。図例②のように丸の図などを書く姿や、大きい○、小さい○など自分で感じたように書く姿も見え、この時期にリズムに伴うダイナミクス（大きい・小さい）などの音楽を味わうことができるが見える。保育の現場においても、例えば「ドーン・トン」などを保育者が身体性を伴って遊ぶことや、独自の音（自然の音、生活の音）に耳を傾けて一緒に楽しむ、などが求められるだろう。

江川愛都紗<sup>(11)</sup>は小林宗作の「総合リズム教育」において「『自然リズム』と『芸術リズム』は相互補完的なものであり、『芸術リズム』は自然と人間との媒介である」と述べている。したがって3歳児は「自然リズム」に思いきり親しみ、自分なりの感じ味わう経験を重ねることで、それらを芸術意識へと繋げることができるだろう。また保育者も「生活のなか」で幼児の個々の特性に応じて「感じる」→「気づく」へと導くことが将来的に「芸術リズム」へとつながることを忘れてはならない。

#### ○4歳児「リズムに気づき、象徴的に表し始める」

4歳児がリズムを叩いてその後書き表したリズムは、かたまりだけでなく、それらに字や記号で注釈をつけたり、例えば「手で叩く」などの意味を含めて、自分の手を見つめて大きく手を書く、聞こえたように文字で「たんたんたん」と書く、など自分なりに体験したリズムを意識して「リズムを人に伝えよう、他のものに置き換えよう」という意図も見られた。また「たんたんたん」「パンパン」など自分なりにリズムや数などを意識していることが、図例⑥⑦から考えられ4歳児のリズムの概念も、この時期から芽生えてくると考えられ

た。このように4歳児はある程度「リズムを自分なりに意識し始める」時期、リズムの輪郭が見え始める時期であると考察できる。また、一人ひとりの特性に応じて感覚的に捉える幼児や概念的に捉える幼児の差も大きくあることも見えた。

したがってこの時期は「自然リズム」に思いきり親しむと同時に「芸術リズム」への気づきを促すことも大切であろう。この時期はリズムを意識し始めるため、例えばダンスで「音の流れ」「音の速さ」などに身体を動かしながら気づくことで、より楽しむことができるだろう。保育者が「芸術リズムへの気づき」を促すには、自分の感動や感激といった思いを、歌やリズムで表す楽しさを伝えることが大切である。例えば幼児が「なんてきれいな花なんだろう」と思ってその絵を描きたくなる。そこには何か描く道具が必要であるように、幼児が「なんて気持ちいいんだろう、なんて素敵な気持ち」と思って動きたくなかった時、自分の身体を自由に使って楽しんで表す方法、歌う方法、演奏する方法などを伝えることが求められる。この時期、保育者が幼児と共に「自然リズム」を思いきり楽しみ、幼児が自分なりに「リズム」を音楽的に感じて表せるように支えることが大切であろう。

#### ○5歳児「リズムをある程度正しく捉え、創造的に表す」

5歳児と一緒にリズムを叩き、それらのリズムを書いてもらった結果、大人には見られない「手を書いて周りに点や丸などの形をちりばめる」「△や□と言葉で長さを表す（図例⑧）」「丸の中に小さな丸を2つ入れる」など、独自で豊かに、感じたりリズムを個性的、創造的に表している。5歳児はリズムを自分なりに個性的に感じ、表せる時期であることが、幼児のリズムの図からもうかがえる。おそらく、小学生になり言語的な表出が多くなると、これらの図式は減ってくるだろう。5歳児はリズム独自の表し方が可能な時期と考えられた。

この時期になると、次第にある程度リズムパターンを理解して表せるようになるため「リズムと一緒に合わせる」楽しさ、「自然リズムからリズムを創ってみる」など、さらに芸術的な関心へと誘うことも大切であろう。小泉文夫(1927-1983)は「リズムは諸要素の総体的な感覚であるから、音楽のリズムを考える前に、それと関係の深い事

柄に注意を向ける必要がある」<sup>(12)</sup>と述べる。そして、音楽のリズムに直接関係のある言葉や労働、舞踊などにも目を向ける大切さを述べている。例えば生活の中で皆で机を運ぶときに「よいしょ、よいしょ」と言って運んだり、散歩のときに上り坂を上るときに「なんださか、こんなさか」など掛け声を合わせるときもあるだろう。この5歳児の時期にこれら生活の中に満ち満ちているリズムを、保育者が楽しく取り入れ、皆で合わせることによって幼児はさらなるリズムを考えたり創り出すことができるようになるだろう。小林宗作はリズムを「精神的リズム」＝生活 感動することである、と述べているように、5歳のこの時期に生活の中で一緒にリズムを合わせる楽しさ、身体的なものから湧き出る思いを共有するからこそ、リズムを創って表す喜びにつながり、音楽リズムへとつながるのではないだろうか。さらにこれらの経験は「協同的な学び」ともつながると考えられる。

## (2) 幼児のリズムの図からの考察

次に3～5歳の幼児が書いた図の特徴についてみていく。マクドナルドらの『最も幼い学習者の獲得すべき基本的概念』を基に、幼児が描いたリズムの図に注目する。

リズムを絵や図でかたまりなどで書いた幼児にはリズムの再現は見られなかった。しかし、ある程度リズムの長短や沈黙(休み)をイメージして書いた幼児は、翌日にもリズムを再現していることが分かり、再現した幼児は、早さ、音の数、繰り返しなどのリズムパターンを自分なりに捉えてたと考えられた。

バンバーガー(Bamberger. J)は、子どもが音楽を描いた図の中に発達水準が反映されていることを強調して幼児の描いたリズムを分類し、幼児が発達水準に応じて一定の表現をするという研究結果を述べている。そして「リズム構造には、本来「図形」と「メトリック」という2つの特徴が本質的に含まれていて、音楽訓練を受けた幼児はメトリックで表すことが多い」<sup>(13)</sup>としている。(注：バンバーガーが述べる「メトリック」とは韻律的で音の長短、高低、強弱、反復などを表す。または計量的である)。本研究で幼児が示した図の半数は図形であり、半数はメトリックであった。年齢が上がるごとにメトリックの図式が多くなり、リズムを再現している幼児もメトリックを書いた幼児がほとんどであった。しかし、はっきりと分

類できない図もあった。

これらのことから、幼児がリズムを捉えるときに、

第1段階として「なんとなくリズムをまとまりとして感覚的に感じて表す」3～4歳

第2段階として「身体性やリズム音の数を意識して捉えて表す」4～5歳

第3段階として「身体性、リズムの音の数、速さを意識して表す(メトリックで書く)」5～6歳という流れが見えた。

これらを概観すると、研究例は少ないが4歳児と5歳児の図は「図形」から「メトリック」へとこの発達がみられると考えられた。そして、「特に音楽的な練習をしていない幼児であっても、年齢ごとに次第に音楽的にリズムを捉える発達があることが見えた。

幼児のリズムを捉える過程に着目すると、幼児がリズムを捉えようとするときに、パンパン、トントン、タンタンなど言葉で表している。それは、知らず知らずに保育者の使う言葉や自分の国の言葉でリズムを受け止めていると考えられる。したがって幼児はリズムを受け止める際に、直接的のみでなく、様々な方向から自分の育ちや言葉も含めて周りの環境を手掛かりにして受け止めていると考察できた。また、リズムを記憶して再現した5歳児がリズムを書く過程では、まず幼児は指で「とんとんととん」などの全体を覚えて、細かく数えながら書く傾向がみられた。すなわち、拍の全体を記憶してそれを書くという姿がほとんどであった。5歳の幼児がリズムを捉えるときに、全体の輪郭から捉え、その後様々なリズムからの気づきを添えるものが多いことは、岡野満里、丹羽劭昭(1973)<sup>(6)</sup>らが、「幼児が始めに全体としてリズムパターンを大まかにとらえ、のちに部分をとらえる。」と述べていることと同じ結果であった。小泉文夫は日本の音楽を「要するに日本音楽では、強弱の絶対的な幅は洋楽に比べて狭いといえるが、その中心部分における微妙な変化は、非常に効果的に用いられていると感じる」<sup>(14)</sup>と述べている。この言葉に象徴されているように、日本の音楽とそのリズムは、繊細であるが、リズムを捉える幼児にも何らかの海外とは違う捉え方があると考えられた。

小泉文夫は、日本人のリズム感を「われわれ日本人のリズムの特徴は、日本語や邦舞や邦楽の中にはっきりと表れるが、それらは-略-日本の風土



的環境、経済や社会の基礎とも関係があり<sup>(15)</sup>」と述べる。したがって、保育者が少なくとも、保育での自らのふるまいの中に日本のリズムがあり、それらは知らず知らずに幼児に育まれ、我が国の音楽リズムを伝承していることを意識すべきであろう。

例えば「わらべ歌」などの伝承に関してもそこには生きたリズムがあり、優しく人に語り掛けるものである。現在はわらべ歌は減少しているが、それらは「手遊び歌」として「相手がいる生きたリズム」として広がりを見せている。これらは日ごろの生活中、遊びの中で人から口伝えされたもの、他を聞いて取り入れていくものであり、日々の生活の中で、幼児が自らリズムを感じて取り入れ、それを表す道筋を保育者が作ることが非常に大切である。

#### V 幼児の音楽リズム発達と今後の課題

本研究において、3歳から5歳の幼児に簡単なリズムを一緒に叩き、図で描いてもらったところ、ほとんどの幼児が独自に表した。図から検討した結果、年齢ごとに3歳児は「リズムを感じる」4歳児は「リズムに気づき象徴的に表し始める」5歳児は「リズムをある程度正しく、創造的に表す」過程が見え、保育の中で特に「リズムを教える」と保育者が意識しなくても、幼児は音楽的にリズムを捉えていくことが分かった。その過程で、幼児は自分なりに个性的に受け止めるだけでなく、大人が考える以上に創造的に音楽的にリズムを捉えていくことが見えた。

ドロシー・T・マクドナルドらは音楽的発達においても「社会性の発達も、成熟の要因に非常に大きな影響がある」<sup>(16)</sup>と述べ、例えばうまくいかないときに、非常に小さなグループで行うなどの環境を整える大切さを述べている。今回の研究で、幼児は自分なりにリズムを理解しようとしている。しかし「わからない」と言って書かなかった3歳児や「好きな絵を描きたい」といった4歳児もいた。この3歳児、4歳児の幼児たちも手を叩くことは楽しんで行っていたように思えたが、リズムを書くという課題は書かなかった幼児たちにとっては、適切なものでなかったかもしれない。このように、幼児にとってリズムを経験する環境は、個々の受け止め方が違い、それぞれの持つ脈略がある。保育者はその場その場だけでなく、自分が行った環境や過程を振り返り、今後の音楽リ

ズムの環境を検討する必要性がある。

中村雄二郎(1993)は、「音楽が私たちの心に染み入るのは、リズム体である音楽と同じくリズム体であるわれわれ一人ひとりが深く共振を引き起こすからである」<sup>(17)</sup>と述べている。小林が述べる「精神リズム」には、それら人と共にリズムを味わう、喜びや感動をもたらすものが不可欠であろう。幼児は大人とは違って、リズムを感じて、気づき、象徴的に捉えて創造的に表していく過程を経て成長していく。ここには、大人がどんなに頑張っても限界があることがみえる。そして、無理に限界を超えても自信を無くしてしまう。ゆっくりと時間をかけて人と共にリズムを味わい、自分のものとして取り込み、繰り返し使い、喜びながらリズムを創りあげ、成長していくことが幼児の音楽リズムの発達には望まれる。

**謝辞** 今回の研究に協力いただいた保育所の先生方、子どもたち、保護者の皆様方に心から感謝申し上げます。

#### 【引用文献】

- (1) 小林宗作 『幼児の教育』「リズムと教育 (―)」VOL47, NO5, p 11
- (2) 小林宗作 『幼児の教育』「リズムと教育 (―)」VOL47, NO5, p 12
- (3) ドロシー・T・マクドナルド, ジェーン・M・サイモンズ (2003) 「音楽的成長と発達」 溪水社, P 57 P 100
- (4) 梅本堯夫 (2003) 「子どもと音楽」 東京大学出版会, P 79, 67
- (5) 古市久子 「幼児のリズム反応における同期と予期」研究年俵16, 115-144, 奈良女子大学, 1972
- (6) 岡野満郷, 丹羽勅昭 「幼児のリズムパターンへの動機に関する発的研究」 体育学研究20 (4), 221-230, 1976-02-05 日本体育大学
- (7) 水野信子, 安藤久雄, 吉田昌春, 「児童の音楽的な区間の獲得」 岐阜女子大学紀要44, 53-61, 2015-01-31
- (8) 高須浩美 「幼児のリズム理解と指導法に関する検討: 4歳児の音楽行為を考察する」 名古屋短期大学紀要 (54), 91-99, 2016
- (9) 持田京子 「子どもの歌の絵からの検討」 埼玉

純真短期大学論文集。2014, (7), P.61 – 76

- (10) ドロシー・T・マクドナルド, ジェーン・M・サイモンズ (2003) 「音楽的成長と発達」 溪水社, 「音楽的成長と発達」 溪水社 P 57
- (11) 江川愛都紗 「小林宗作のリズム教育論：始まりとしての「自然」と媒介しての「芸術」 東京大学大学院研究室紀要 (39) 117 – 125, 2013 –
- (12) 小泉文夫 (1994) 「音楽の根源にあるもの」 p 41, 平凡社,
- (13) Bamberger. J The mind behind the musical ear: [How children develop musical intelligence] ,Harvard University Press
- (14) 小泉文夫 (1994) 「音楽の根源にあるもの」 p 49, 平凡社,
- (15) 小泉文夫 (1994) 「音楽の根源にあるもの」 p 168, 平凡社,
- (16) ドロシー・T・マクドナルド, ジェーン・M・サイモンズ (2003) 「音楽的成長と発達」 溪水社, P 163
- (17) 中村雄二郎 (1993) 「表現する生命」 青土社, p 35-39